

日本におけるフランス語 —幕末・明治初年を中心として—

澤 護

本稿は幕末・明治初年におけるフランス語の流れを把握し、洋学の拠点であった蕃所調所から東京大学に至る間でのフランス語学習の流れを考察したものである。

(一)

16世紀の初め日本は西欧諸国と交流を始め、この世紀の後半になるとこの交流はかなり密なものとなっていた。しかし、三代将軍・家光の代に、宣教師によって改宗させられたキリスト教信者たちへの大量虐殺、さらには宣教師55名を火刑にするといった血なまぐさい反動がもちあがった。この時を境に、日本はオランダを除く諸国に対して門戸を閉ざし、長い鎖国政策をとった。したがって、外国語を学ぶことも禁じられ、日本人の脳裏から外国も忘れ去られたものとなっていたが、ひとりオランダ語のみが少数の日本人によって学ばれていたにすぎなかった。

鎖国令が発布され、日本人の海外渡航が禁じられ、また海外在住日本人の帰国が禁止されていた真中に、日本における布教という強い願望にかられて、キリシタン弾圧をもかえりみず、1636年(寛永13)7月琉球に渡ってきた宣教師たちの中に、ギヨーム・クールテ(Guillaume Courtet, 1590-1637)というドミニコ会のフランス人修道士がいた。彼こそ日本の地を踏んだ最初のフランス人ではあったが、琉球に着くとすぐ捕えられ、

約1年間ここで極めて忌わしい生活を余儀なくされた。その後、彼は長崎に連行され、ここでもさらに厳しい水責めなどの拷問を受け、1637年9月29日首を刎ねられ殉教した¹⁾。これから19世紀初頭まで、日本とフランスの関係は完全にとだえることとなった。

文化3年(1806)10月、ロシア海軍大尉ニコライ・アレクサンドロヴィチ・フボストフ(Nikolaj Aleksandrovich Khvostov)は、サハリン(樺太)南部のアニワ湾に上陸し、日本人部落を襲撃し、さらにエトロフ島でも暴行略奪を欲しいままにし、紗那では日本の警備兵を敗り、1通の文書を残して立ち退った。この文書は、差出人の署名も日付も記入されていないものではあったが、松前奉行に宛て日露の通商関係を結ぶことを要求し、もし日本側がそれに応じないのであれば、やがてはロシア帝国が日本の領土を攻略することになろうという極めて厳しい内容を持つ開国要求書であった。

この文書はフランス語で書かれたものであったため、だれひとりとして解読できる者がいなく、翌文化4年に長崎奉行は出島のオランダ商館長ヘンドリック・ドーフ(Hendrik Doeff)に対し、この文書のオランダ語訳を求めたのであった。オランダ語から長崎の日本人通詞たちの手によって日本語に訳されたこの文書の内容を知った長崎奉行は驚き、急ぎ江戸表に事の次第を通報した。

この1通のフランス語で書かれた開国要求書によって、長崎のオランダ語通詞たちの間に、フランス語学習の必要性の声が生じ、6人のオランダ語通詞(石橋助左衛門、中山作三郎、本木庄左衛門、今村金兵衛、檜林彦四郎、馬田源十郎)が、長崎奉行と幕府に届けでて許可を得た上で、ドーフについてフランス語の学習を始めた。文化5年(1808)2月のことであった。彼らこそ日本で最も早くフランス語研究に着手した人たちではあったが、この6人の通詞たちのフランス語学習習得の成果や経過はほとんど伝えられていない。ただ、本木庄左衛門(正栄)が中心となって編纂

した「²⁾拂郎察辞範」と「³⁾和仏蘭対訳語林」という2冊の書物によって、かろうじてその学習ぶりやフランス語研究の源泉を知ることができる。

「²⁾拂郎察辞範」は4分冊から成っており、その冒頭の「²⁾拂郎察辞範題言」で、「特に拂郎察語の如きに至っては西洋諸邦語厄利亞魯西亞等に致るまで通ぜざる所なく志かも此國語を以て文章の本宗言語の大規範となす……」とフランス語の国際性、フランス文化の優秀性に注目している。4分冊のうち、3分冊の途中までフランス語に日本語の片カナ表記がしてある。この発音表記をみると、どうしても奇異な表記がみられるが、おおむね正確で、ドゥーフがかなり正確にフランス語の発音を教えていたことや、通詞たちの耳のよさなどが理解される。これら2冊の書物は、ドゥーフの帰国した年から推定して文化14・15年(1817・1818)頃のものと考えられるが、実際には印刷されて売りだされたものでないため、その後のフランス語普及には全く役立つことなく終わった。また、およそ9年あまりドゥーフについての通詞たちのフランス語学習もとだえてしまい、彼らの業績は全く知られず、長崎に日本のフランス語の源流を見いだすことはできない。ひとりとしてフランス人のいない当時、いつ役に立つのかわからないフランス語の学習に身が入らないのも当然で、しかも支えとなっていたドゥーフが帰国してしまえば、泥縄式で始めた通詞たちのフランス語も消滅してしまうのも無理ならざることであった。

再び長崎でフランス語が陽の目を見るようになるのは、6人の通詞たちが始めてフランス語に取り組んでから60年も経過した時である。文久3年7月に語学所が創設され、慶応元年に済美館、明治元年に広運館と改称され、英語、ロシア語などの他にフランス語も教授した。慶応元年からプチジャン(Bernard Petitjean)神父がフランス語を教え、かつて長崎のフランス領事であったデュリー(Léon Dury)が明治3年に広運館でフランス語を教えるようになった。広運館では英、仏、露、清国語を教えていたので、各府藩県から語学を学ぼうとする多くの若者が集まり、明治3年

には英語を学ぶ者が111名、フランス語を学ぶ者が48名を数えた⁴⁾。しかし、明治4年にデュリーが京都に転出し、デュリーの代りとして赴任してきたド・ペルピニア (De Perpigna, Arthur) は違約によってすぐに解雇させられるといった事態がもちあがり、明治6年の広運学校 (明治5年8月広運館を第六区第一番中学, 明治6年さらに広運学校と改称) における生徒数90名に対して、フランス語の学習者は皆無であったから、広運館でのフランス語は開花するところまではいっていない。それでも、デュリーの元からは西園寺公望や井上毅などが輩出している。

(二)

嘉永元年 (1848), 松代の医師・村上英俊 (1811~1890) がふとした機会から、独学でフランス語を学習するようになった。長崎の通詞たちがフランス語の学習を中継してから、およそ30年が経過している。村上英俊は篠山藩侍医・足立長雋, 津山藩侍医・宇田川榕庵に師事して医学と蘭学を学び, 31才の折に江戸より松代に移り住んだ。彼はここでフランス語で書かれたベルセリウス (Berzelius) の化学の書を手に入れたことにより, 全くの独学でフランス語の研究に専念するようになった。

村上英俊がフランス語を学習するようになった動機について, 土屋政朝⁵⁾氏や滝田貞治氏⁶⁾はベルセリウスの化学書と取り組んでフランス語を学習しだしたとする説に対し, 有馬成甫氏は, 一介の藩医が松代にいながらにして複雑な手続きをとって海外にこの書を注文することができたか, また短期間の間に英俊が難解なフランス語の化学書を読破できたかなどといった点から反論している⁷⁾。英俊のフランス語学習の動機については, なお考察しなければならない面もあるが, 英俊は明治14年に次のように語っている。

明治14年3月5日, 「フランス語学会」の開会式が, 600名を越す参加者

をみて東京で開催された。この席上、ボワソナードは経済学に関する詳細な講演をしたが、この後で村上英俊が会員に紹介された。この折、英俊は40年前にフランス語を一語も知らなかった時に、フランス語で書かれた化学書を提示され、オランダ文法を通じてフランス語を学び、蘭仏辞典の助けを借りながら一語一語フランス語の意味を捜し求め、5年の歳月をかけてこの化学書を訳したと語っている⁸⁾。また、英俊が元治元年(1864)に刊行した『仏語明要』の凡例において、「嘉永元年五月初テ。佛蘭西文典ヲ取テ。之ヲ閲スルコト。五閱月。聊カ文法ヲ知ル。故ニ更ニ。別爾撰律私ノ著書ヲ取テ。之ヲ閲スルニ。一行ヲモ読コト能ハス。遂ニ語書ニ因テ。語ヲ瘦策シテ。指意ヲ探リ。晨夜専意積精スルコト。茲ニ十有六月ニシテ。竊ク読得ルコトヲ得タリ⁹⁾。」と記載している。

英俊が150両もの大金を投じて化学書を入手することができたかなどいくつかの疑問点がないではないが、少なくとも英俊がフランス語を学ぶようになった動機は、フランス語で書かれた化学書を手に入れたことで、オランダ語を通してフランス語を学んでいったことは事実であろう。

村上英俊は嘉永4年に松代より再び江戸にでて、フランス語を広く世に伝えようとの強い願望にかられて、フランス語字書の編纂に着手した。鎖国中、洋学者はただひとつ学習を認められていたオランダ語を学んでいたが、これに極く少数の者が学んでいた英語に目をつけ、この2カ国語にさらにフランス語を加えた3カ国語字書を作ろうと企てた。この辺は、近い将来フランス語も広く一般の人たちに学ばれるようになるかと予測した村上英俊の先見の明である。この字書は嘉永7年(1854)頃に刊行されたが、これによって英俊の名は広く知られることとなった。彼は安政2年(1855)に『洋学捷徑 佛英訓辨』、安政4年(1857)に『佛蘭西詞林』、安政5年『五方通話』(仏・英・蘭・日・羅の5カ国語対照字書)、元治元年(1864)『佛語明要』と続けさまに字書を刊行していった。

村上英俊はこれら字書の刊行によって、日本におけるフランス語の第一

人者となり、安政6年（1859）3月に日本で唯一の洋学研究所であった蕃所調所（後の洋書調所、開成所）の教授手伝として任命され、初めてフランス語科が組み入れられることになった。「蕃所調所起源考略」によると、「文久元年辛酉六月十日 林正十郎小林鼎輔出役教授手傳トナル佛蘭西学ヲ教フルノ始メナリ此科ヲ設クルニハ市川氏（筆者注 市川齊宮か？）大ニカアリト云¹⁰⁾」とあるので、英俊は翻訳方に回されて、英俊の門弟であった林正十郎と小林鼎輔が英俊の推輓で入所しフランス語の教授手伝となったと考えられる。文久2年（1862）には、多門季三郎と岩間久之丞が句読教授として入所し、元治2年（1864）3月の「開成所人名録」に教授職同並として柳河春三、教授手傳出役として外国兼勤・村上英俊、小林、林、入江文郎の名が見られる。慶応2年（1866）6月の「開成所人名録」では村上英俊の名がないことから、この年頃に彼は開成所を辞めたと考えられる。洋所調所・開成所のこの頃のフランス語教師は、村上英俊の息のかかった者とはいってもそれほど程度が高かったとは思えない。調所の教科書用に作ったと思われる『佛郎西单語篇』¹¹⁾（文久2年刊）や開成所の『法郎西单語篇』¹²⁾（慶応2年刊）を使用した授業では、お世辞にも十分な効果が上った学習とはならなかったはずである。

村上英俊は明治元年に深川猿江町で「達理堂」なる私塾を開き、フランス語を教え生活の糧としていた。「達理堂」で学んだ生徒は合計429名を数えたが¹³⁾、この門人の中に、榎本武揚、中江兆民、濱尾新、加太邦憲、磯部四郎、栗塚省吾など多勢の知名の人の名が見られ、中江兆民や林正十郎などが破門されていて興味深いものがある。「達理堂」の生徒数は一見したところ数が多いように思えるが、明治5年から9年頃にかけて外国語を教える学校・私塾は100校あまりもあり、明治6年の東京外国語学校だけを取りあげてみても生徒数453名に対し、フランス語科生は75名を数えている¹⁴⁾。また、維新直後の文明開化という社会風潮は学問の世界にも如実に現われ、全国で外国語を教える学校・私塾は明治7年に91校、

8年103校、9年92校もの多きを数えたが、10年28校、11年34校と自然に淘汰されていった。¹⁵⁾これらの外国語学校では、蘭学は完全にすたれ、英学が中心となり、仏学と独学が僅かながら開校された。フランス語のみを教えた学校も数校あったが、英語と併用するところが多かった。完全に調査はできあがってはいないが、フランス語を教えた官立学校では開成学校と東京外国語学校などがあり、表1で私塾の状況をまとめてみた。仏学専修の私塾を中心に表にまとめたが、中に若干仏学の他に英学等併設されたところも含めてある。これら仏学を教えた学校の設立年は明治5～7年に多く、明治10年に入るとほとんど消滅してしまったようである。なお、これら私塾の責任者や教師名などの調査は、これからの調査に負うところが多い。表1ではフランス語を中心に教えた塾の明治5～7年設立されたものを掲げたが、明治11年に大阪の嘉樹院、明治12年に京都の愛良学舎、大阪の修道館、岩手の共立私学校などでもフランス語を教えている。

ところで、村上英俊の「達理堂」も明治10年に閉塾を余儀なくされたが、これは英俊のフランス語の発音では通じないといった評判が立ったのとおそらく関係があったであろう。彼の数多い字書の発音表記から判断すると、とてもフランス人に通じる発音にはならなかったはずで、この辺が独学で学んだフランス語研究者の限界であったような気がしてならない。それでも、英俊が仏学に真摯に取り組み、日本における仏学の基礎を確立し、多くの門弟を輩出していったことは高く評価される。

幕末のフランス語学習はまず長崎でオランダ人を通して行なわれ、一方、江戸では村上英俊が独学でフランス語を学び教授していた。この他に、フランス人による教授があった。

(三)

フランス人によるフランス語の教授とは、幕末に来日したジラルール、カ

表1 フランス語を教えた私塾 16)

名 称	責 任 者	設 立 年	生 徒 数	教 員 数	所 在 地	備 考
達理堂	村上松翁	M.元	M.7 40 M.8 24	2	深川猿江町8	開塾中の生徒数は429名
会友舎	山本周朝	M.4	M.5 30 M.7 25 M.8 29 M.9 13	1	小石川諏訪町	
迎義塾	林 欽 次	M.5	M.5 55 M.7 59 M.8 10 M.9 70 M.11 42	2 (仏人1) 外人2	愛宕町	フーク 11年英・独・仏を併設
共学舎	山田正度	M.5	16	1	丸山本妙寺中 感応院同居	
日章堂	渡 辺 济	M.5	104	3	檜物町1	英・仏・算
協営学舎	本吉太兵衛	M.5	49	2 (外人1)	堀江町4	英・独・仏・支・他
第二番 中 学	有栖川二品宮	M.5	63	外人3	烏森町5 分部光謙私邸	英・独・仏
塾名無	浦口善養	M.5	63	4	三田4丁目	仏・習字・他
共学社	西野讓五	M.5	57	1	三田2丁目	英・仏
成豊学舎	宮田敬之	M.5	13	1	飯田町3	仏・支・数・他

日本におけるフランス語

名 称	責 任 者	設 立 年	生 徒 数	教 員 数	所 在 地	備 考
共 研 舎	岡 田 忠 成	M.5	14	1	小石川原町	仏・支
仏 学 校	京 都 府	M.5	M.7 39	仏人2	京都立売金座	デュリー夫妻
欧 学 校	?	M.5	M.7 110	独人2	滋賀県坂本町	英・仏・独・荷
訓蒙学校	佐久間 正 節	?	M.7 78	3	一ツ橋通町	英・独・仏
欧 学 校	大 高 幸 一 郎	M.6	M.7 41	4 (仏人1)	岐阜県大垣	
海南私学	山 内 豊 範	M.6	?	仏人1	箱崎 4 丁目	モンツール
資生学舎	岡田三右衛門	M.6	?	仏人1	本兩替町10	ガロー
塾 名 無	田 子 正 一	M.6	5	1	浅草新右衛門町	
塾 名 無	高 松 凌 雲	M.6	?	1	米沢町 1	仏・医
陶化学校	工 藤 淳 之 助	M.7	2	仏人1	弘前山道町	
塾 名 無	中 神 守 洋	M.7	10	1	下谷御徒町	
玫瑰学校	ラングレー	M.7	24		浅草橋屋町	
仏 学 舎	田 村 柝 秀	M.7	3	1	江戸川町 6	
塾 名 無	水 野 直 弘	M.7	?	1	下谷御徒町	
仏 学 塾 (仏学舎)	中 江 篤 助 (一介)	M.7	M.10 47	1	六番町45 五番町 2	17年理学を 教授

ションといった神父たちによる教育だが、特にカション (Mermet Cachon) が校長となった横浜の仏語伝習所 (仏語学所, Collège Japonais-Français) は大規模なものであった。この仏語伝習所は、慶応元年の春に幕府とフランス政府の協力によって横浜の弁天に設立されたが、これは幕府の陸軍改革のためフランスより陸軍教師団を招いた際に、日本人とフランス人との間の言葉の障害をなくするため、フランス語に秀れた人材を育てようという目的を持っていた。ここでは日曜日を除き、毎日平均6時間の授業がフランス人によって直接教授され、しかも全寮制がとられたから、短期間の間に相当の効果をあげた。明治元年廃校になるまで約80名の卒業生が出たが、卒業生の進路は陸・海軍省を中心に、外務省、文部省、工部省、内務省など多岐に渡っている¹⁷⁾。特に会話に関しては、江戸の開成所とは完全に差が付き、横浜伝習所の卒業生はとりわけ三兵衛伝習や120名余もフランス人のいた横須賀造船所で手足となって活躍していた。横須賀造船所と横浜製鉄所、第1次および第2次フランス陸軍教師団に関しては稿を改めて考察することにしたい。

(四)

幕末の日本におけるフランス語教育機関は、横浜の仏語伝習所と江戸の開成所とが二大機関があった。蕃所調所は洋書調所——開成所——開成学校——大学南校——南校——第一大学区第一番中学——開成学校——東京開成学校——東京大学と実に目まぐるしく校名が改称されはしたが、官学の最高の教育機関であった。文久2年5月、蕃書調所を洋書調所と改称した折に、箕作貞一郎 (麟祥) を英学助教授とし、林正十郎を佛学助教授として両科に分けたが、箕作麟祥は慶応3年のパリ万国博に徳川昭武に随行したことにより英学より仏学へ転向するようになった。麟祥は明治2年中博士、明治4年大博士と出世街道を進むかたわら、明治2年に神保町に私

塾を開いて英仏学を教えた。フランス帰りの学者が開いた塾とあって、村上英俊の塾より麟祥の塾に走る生徒がでて、英俊としてはどうすることもできなかつたであろう。実際、明治3年以降の麟祥の業績は目ざましいものがあり、法律関係の著訳だけでも15著を数えるほどである。

明治元年9月、開成所は開成学校として教場を開き、英・仏語を主として教え、後に独語が加えられることになった。明治6年4月に第一大学区第一番中学から改めて開成学校と改称された折に、法学、理学、工学、諸芸学、鉦山学の専問5学科が置かれ、法・理・工学科は英語を、諸芸学科は仏語を、鉦山科は独語をもって教授することに決定した。この際、教授する語学が問題となり、多勢のお雇い外国人が雇用されることになった。表2は文部省雇いの外国人を国別に表に示したものだが、明治5年と明治6年のお雇い外国人の合計数を見ると、いかに外国人による教育を重要視しようとしていたかが理解される。したがって、横浜や東京に居留していた外国人を雇用した場合もあって、必ずしも秀れた教員ばかりでなく、生徒側から批判がでたりして雇止めすることもしばしばあった。東校の医師マッセ、南校のガローらがフランス教師としてはそれに当たる。

表2は文部省雇いの外国人の数を示したものであるが、全国の文部省所轄の学校で教えていた外国人教員の数はこれより遙かに多く、明治7年には103名、明治8年は101名、明治9年は97名を数えている。政府雇いの外国人は、どの部門をとっても明治10年以降経費削減のために大幅に減少しているが、教育関係でも同様のことが表2からわかる。しかし、私学における外国人教員の数は増え続け、明治19年には130名、明治20年には188名もの多きになっている。

ところで、東京開成学校では明治8年7月に、それまで英・仏・独語をもって講義してきたものを英語一本にし、諸芸学科での仏語は独語に変更された。それまでの仏語をもって教えられてきた生徒は、仏語をもって物理学科の学習をすることになった。これら仏語で物理学を修めていた生徒

表2 文部省雇外国人国別人数 (明治5~20年) 18)

年代 \ 国籍	仏	米	独	英	蘭	露	清	瑞西	白	墺	朝	丁抹	計
5年 月	4	6	8	5								1	24
6. 7	11	17	23	12	7	1	1						72
7. 3	11	15	25	17	5	1	2						76
8. 6	10	17	19	23		1	1	1					72
9. 6	8	23	22	21		2	1	1					78
10. 6	8	13	15	13		2	1	1					53
11. 6	6	13	15	9		2	1	1		1			48
12	4	8	8	9		2		2		1			34
13. 8	3	15	11	6		1	1	2		1			40
14. 12	3	7	11	3	1	1		2		1			29
15. 7	3	6	11	3	1	1	2	2		1	1		31
16. 12	2	3	10	3	1	1	2	1			1		24
17. 12	3	3	11	3	2		1	1			1		25
18. 6	2	3	11	5	2		1	1		1	1		27
19. 4	2	3	10	11	1		1						28
20. 12	4	11	11	16	2				1				45

注 白はベルギー，丁抹はデンマーク。

表3 文部省派遣海外留学生表 (明治8年~20年) 19)

年代	国名	仏	米	独	英	澳	計	備考
8年 8月		1	9	1			11	明治4年, 開拓使は津田梅, 山川捨松を米国に派遣, 15年6月文部省の管理となる。(15年11月帰国) 13年9月米国留学生帰国 独留学11名中9名は医学留学生
9		3	9	1	8		21	
10		3	9	1	6		19	
11		3	9	1	6		19	
12		4	9	6	7		26	
13 12		5		6	8		19	
14		2		5	3	1	11	
15 12		2		11	3	2	18	
16		1	1	16	1	1	20	
17			1	20	1		22	
18		1	1	16		2	20	
19		1	2	16	1	1	21	
20		1	3	12	3		19	

表4 文部省派遣フランス留学生名 (明治8年~24年) 20)

氏名	年令	学科	留学先	学資	派遣日	帰国日	備考
古市公威	21	諸学芸	パリ	英 200 円	8. 7. 18	13. 10. 21	{先に英留学, 13年仏留学。
沖野忠雄	26	物理学	〃	〃	9. 6. 25	14. 5. 16	
山口半六	22	〃	〃	〃	〃	14. 6. 24	
向坂兌	26	法学	〃	〃	〃	14. 5. 16	
寺尾壽	25	物理学	〃	銀1070円	12. 5. 17	16. 3. 6	
難波正	21	〃	〃	〃	13. 10. 31	17. 4. 28	{19.2.21 リヨン着, 22.7よりベルリオン大学留学。
梅謙次郎	26	法律学	リヨン	?	18. 12. 19	24.	

注 年令は留学時

の最後の者たちは、明治13年7月に理学士となって卒業したが、この際に物理学科は廃止された。物理学を教えていたベルソンもこの折に解雇され、お雇いフランス人は司法省と東京外国語学校の数名となったのである。明治14年9月になると東京大学では理・文の学生に独語を必ず兼修させることに決定し、仏語は法学部でかろうじて兼修させられていただけであった。日本の教育が次第にドイツに傾倒していくのがわかるのは表3である。文部省派遣の留學生数を示したもののだが、明治12年以降のドイツ留學生の数が極めて増加していることがわかる。明治8年より20年までの間のフランス留學生数は6名（英国留学より仏国に留学した者を加えれば7名）、であるのに対して、ドイツ留學生は24名、イギリス留學生は22名、アメリカ留學生は15名となっている。この数は明治年間全期を通してみると驚ろくほどのドイツ偏重で、ドイツ留學生は209名、フランス留學生は16名といった具合である。

この例は別段海外留學生にのみ見られる現象ではなく、当時の外国語学校（各種学校）の数やその生徒数でも同様のことがいえる。煩雑さをさけるために2年度分のデータのみを示すと、明治13年フランス語を教えていた学校7校（生徒数137名）に対してドイツ語を教えた学校は3校（生徒数84名）であったものが、明治18年になると前者は7校（174名）で後者は27校（2,752名）といった具合で、政治、社会状況が如実に反映している。このようなことは、お雇い外国人からも考察できるが、本稿では末尾に「文部省雇フランス人表」を掲げることとどめた。

幕末より明治初年における日本でのフランス語の大きな流れを記述したが、東京外国語学校、明法寮などにまで言及できなかった。また、個々の細かな論旨は別の機会に述べることになるかと思う。

注 1) レオン・パジェス、吉田小五郎訳『日本切支丹宗門史』に、殉教者たち

への拷問の状況は詳しい。

- 2) 長崎市立博物館蔵。
- 3) 同上。
- 4) 「長崎県史料」学校（国立公文書館蔵）
- 5) 土屋政朝『村上英俊先生之伝』（明治24年刊）「先生嘗テ蘭書ヲ閲シ別爾撰律私 J.J.Berzélius ノ著書アルヲ知り之ヲ読マント欲ス偶々其仏文化学論ヲ得タリ友人佐久間象山仏文ヲ習読スルコトヲ勸ム是ニ於テ嘉永元年戊申五月朔テ自ヲ仏書ヲ習読シ師授ヲ待タス辞書ニ頼リ十六月ヲ閲シテ遂ニ之ヲ読ミ得タリ」
- 6) 滝田貞治『佛學始祖 村上英俊』（昭和9年刊）「待つこと一年有半にして同書（筆者注 ベルセリウスの化学書）は無事一五〇両の大金を投じ、千秋の思いせる英俊の手に帰する事になった。所が繙書一番驚いたのは、彼の蘭学の智識を以てしては一語もこれを読解する事が出来ないことだ。（一部略）彼は蘭学まがいの語学知識では、如何ともなす能わざるを知るや、はじめて、根本的に仏語学習を発起したのである。」
- 7) 有馬有甫「村上英俊の仏蘭西語修得の動機に就て」（蘭学資料研究会『研究報告』12号。昭和31年）
- 8) “L’Echo du Japon” 1881.3.7号
- 9) 村上英俊『佛語明要』凡例。（元治元年刊）
- 10) 『日本教育史資料』七。666頁。
- 11) 国立国会図書館蔵
- 12) 同上
- 13) 滝田貞治『仏学始祖 村上英俊』上巻。藤田東一郎「三語便覧と佛英獨三語便覧に就て」（『書物展望』第11巻3号）。富田 仁『佛蘭西学のあけぼの』
- 14) 『文部省第一年報』（明治6年）
- 15) 『文部省第二～第六年報』（明治7～11年）
- 16) 「私学開業願書」,「家塾開業願書」,「私学明細表」（以上 都公文書館蔵）,『文部省年報』より作成した。
- 17) 卒業生の進路については、西堀 昭「神奈川の仏学——幕末——横浜表『語学所』を中心として——」（『神奈川史談』15号）に詳しい。
- 18) 『文部省年報』（第2～第7）
『太政類典』（第2編第64巻第2類,第3編第17巻第2類,第3編第17巻第2類,第4編第12巻第2類,第5編第9巻第2類）
『文部省御雇外国人明細表』（明治7年3月）
『傭外国教員録』（明治13年12月,14年12月,15年7月,16年12月,17年12月,18年6月,19年4月,20年12月）

『文部省御傭外国人明細表』(明治6年8月)
等より作成した。

- 19) 『東京開成学校一覽』(明治9年刊)
『東京大学法理文三学部一覽』一~四
『海外留学生表』(明治15年~明治20年)
- 20) 注19)に同じ。
- 21) 叙勲の詳細は、拙稿「叙勲を受けたお雇いフランス人」(『仏蘭西学研究』第8号)を参照願いたい。

表5 文部省雇フランス人表 (明治元年~40年) 21)

氏名	職務	雇入期間	給料(月)	摘要
プーセ Pousset, Fernand	仏語	雇元. 12. 20より2年 (開成学校) さらに1年雇継 雇 3. 7. — ~ 6. 11. — (大阪兵学校) 9. 8. — 解傭	250元 300ドル	横浜仏語学所教師 少尉相当以上の待遇
ガロー Garraud, (Remi?)	仏語	雇 2. 5. 1 ~ 2. 10. 30 継 2. 11. 1 ~ 3. 4. 29 3. 5. 1 ~ 5. 3. 30 5. 4. 1 ~ 5. 9. 29 (大学南校)	250元 200元	4年当時30歳 5年~8年私雇となる
マイヨ Maillot, H. X.	窮理学 物理学 博物学 化学	雇 3. 7. 1 ~ 4. 6. 29 (大学南校) 継 4. 7. 1 ~ 5. 6. 29 5. 7. 1 ~ 6. 7. 23 6. 7. 24 ~ 8. 7. 23 (開成学校)	250ドル 300ドル 350ドル	3年当時37歳 7. 8. 14横浜で病死
マッセ Massais, E.	医師	雇 3. 10. 24 ~ 3. 11. 23 (東校) 雇 4. 7. 1 ~ 4. 12. 30 (高知藩病院)	400元 400ドル	4年当時35歳 10. 10. 9 横浜で逝去
ド・ペルピンヤ De Perpigna, Arthur	仏語 語学 翻訳	雇 3. 7. 1 ~ 4. 6. 29 (大学南校) 雇 4. 7. 1 ~ 4. 11. 29 (大阪開成所) 雇 5. 2. 5 ~ 5. 11. 5 継 5. 11. 5 ~ 6. 5. 5 (長崎広運館) 雇 10. 9. 1 ~ 11. 2. 9 (仏国博覧会事務局)	200ドル 200元 300元 日給5円	デュリー代員 6. 1. 31違約により雇止。

氏名	職務	雇入期間	給料(月)	摘要
ピジョン Pigeon, F.	仏語	雇 3.12.24~ 4. 6.28 継 4. 6.28~ 5. 3.25 (大学南校) 継 5. 3.25~ 6. 8.26 (開成学校) 雇 6.10.18~11. 4.17 (東京外国語学校) 10. 9. 1解約	250元 175円	6年当時31歳
ムーリエ Mourier, Pierre Joseph	仏語 法律 通弁	雇 4. 8. 1~ 6. 9.21 (名古屋洋学校) 雇 7. 3. 5~ 8. 3. 4 雇替7.11.1~ 8. 3. 5 (明法寮) 継 8. 3. 6~13. 4. 9 (司法省)	年4000円 250円 300円	1827.5.6生 1866.横浜で医師 13年4月病氣 辞職
デュリー Dury, Léon	仏学 訓導 仏文学 史学	雇 3.10.28~ 5. —. — (長崎広運館) 雇 4.10.20~ 8. 2. 5 (京都中学) 雇 8. 4. 4~ 9. 8.31 (開成学校) 雇 9. 9. 1~10.11. 4 (東京外国語学校)	洋銀200枚 洋銀250枚 260円	1824. 5.12生 1862. 5.10来日 1863. 長崎仏国 領事 1866. 横浜仏国 領事 10.11.20帰国 18.2.3勲四等 24.10.24没
デュリー妻 (ジョゼヒーヌ)	仏語	雇 5. 7. 1~ 8. 2. 5 (京都中学)	100円	6年30歳
ド・リベロール De Riberolles, Henri	仏語 法律	雇 4.10.22より月雇 雇 4.12. 1~ 5. 5.30 (南 校) 雇 5. 8. 4~ 5. 8.26 継 6. 9.26~ 7. 9.26 (明法寮)	250円 250円	5.7.雇入とも。

日本におけるフランス語

氏名	職務	雇入期間	給料(月)	摘要
クーザン Cousin, Jules	仏語	雇 5. 2. 1~ 5. 7. 30 継 5. 8. 1~ 6. 8. 22 (大阪開明学校) 6. 9. 21 解雇	200円	6年31歳
レピシエ Lépiessier, E	数 学 天 文 学 仏 学	雇 5. 2. 1~ 6. 2. 26 (南 校) 継 6. 2. 27~ 6. 12. 31 (第一番中学) 継 7. 1. 1~ 7. 12. 31 (開成学校) 7. 6. 11 病气解約	300円 350円	5年45歳 4. 11. 21来日 7. 6. 16帰国
フォンテーヌ Fontaine, H. Gonzalve	仏 学 仏 文 学	雇 5. 2. 28~ 8. 4. 3 (開成学校) 8. 4. 3 解雇	200円 後250円	5. 2. 29来日 5年28歳
ダルジャンス D' Argense	仏 語	雇 5. 3. 16~ 5. 9. 16 (大学南校) 5. 8. 15依願退職	200元	ガロー代員 5年35歳
グーピル Goupil, A.	仏 語	雇 5. 4. 1~ 5. 9. 29 継 5. 10. 1~ 6. 3. 31 (第一番中学) 雇 6. 4. 1~ 7. 4. 1 (陸 軍 省)	200元 150円 250円	ダルジャンス代員 5. 10. 15 依願退職
ブラン Brun, Nicolas	仏 語	雇 5. 10. 16~ 6. 11. 4 継 6. 11. 5~ 7. 11. 4 (開成学校) 雇 7. 11. 5~ 9. 6. 15 (東京外国語学校)	150円 150円	横浜仏国公使館 書記(5年) 5年29歳
フロイデン ターレル Freudenthaler, J. A.	仏 語	雇 6. 4. 8~ 6. 10. 7 (開成学校)	150円	6年27歳 語学教師不足のため雇入

氏 名	職 務	雇 入 期 間	給料(月)	摘 要
フ ー ク Fouque, Prosperè Fortune	語 学	雇 6. 1. 1~ 6. 6. 30 (開 拓 使)	200円	1843. 5. 4生 3. 7. 27来日 私塾「迎義塾」に て仏語教師 18. 2. 5 勲五等 39. 7. 9 勲四等
	数 学 線 画	雇 6. 9. 14~10. 9. 13 (開成学校)	250円	
	法 律	雇10. 9. 15~12. 9. 14 (司 法 省)	200円	
	訓 導	雇13. 4. 2~17. 9. 1 (東京外国語学校)	230円	
	仏 語	雇19. 9. 20~38. 10. — (学 習 院)		
ミ ッ ト ン	仏 語	雇 6. 2. 12~ 6. 8. 11 (長崎広運学校)	200円	6年32歳
リ ュ ー Rieux, A.	文 学 数 学	雇 7. 3. 9~ 8. 3. 9 継 8. 3. 9~ 8. 7. 8 (開成学校)	200円	6. 5. 26来日?
プ ラ ー Prat, Paul Edgar	天 文 学	雇 7. 4. 8~ 8. 4. 7 9. 4. 7 解雇 (東京外国語学校)	150円	フロイデントー レル代員
ク ロ ッ ツ Klotz, Francis	物 理 化 学	雇 7. 8. 2~ 8. 7. 31 継 8. 9. 30~ 9. 3. 12 継 9. 3. 13~ 9. 9. 12 (開成学校)	300円	レピシェ代員 9. 7 解雇
マ イ エ Mailhet, F. Etienne	医 師 物 理 化 学 博 物 学 医 師	雇 5. 11. 1~ 8. 12. 31 7. 5. 15退職 (富岡製糸所) 雇 7. 10. 26~ 8. 10. 25 (開成学校) 雇 8. 11. 1~11. 10. 31 (鉦 山 寮) 13. 6. 20解雇	 250円 300円	4年海軍省雇 マイヨ代員 13. 5. 14帰国

日本におけるフランス語

氏名	職務	雇入期間	給料(月)	摘要
マンジョ Mangeot, Stéphane	数 理 学 学	雇 8. 5. 14~10. 5. 13 (開成学校) 雇10. 6. 12~10. 7. 10 継10. 8. 11~12. 7. 10	350円 370円 (11. 10. 1 より)	10. 5. 13一旦解雇 12. 5. 31帰国 18. 2. 3勲四等
ベルソン Berson, Felix Gustave Adolphe	諸 芸 物 理 数 学	雇 9. 6. 7~11. 6. 6 (開成学校) 継11. 6. 7~13. 7. 6 (東京大学)	350円	13. 7. 9帰国 18. 2. 3勲四等
エスナール Hesnard, Hippolyte	訓 導 語 語	雇 9. 6. 16~12. 12. 15 継12. 12. 16~15. 7. 15 (東京外国語学校)	250円 300円	
ド・ モントゥール De Montour, Edgar Lebeau	訓 導 語 語	雇 9. 11. 2~10. 11. 1 (東京外国語学校)	175円	6. 5. 1~6. 12. 31 私塾「海南私学」 にて仏語教師
ファール Fabre, Antoine	訓 導 法 学	雇10. 9. 2~13. 4. 1 (東京外国語学校) 雇13. 6. 8~14. 8. 6 (司法省)	175円 200円	
ボン Bon, H.	仏 語	雇10. 11. 5~11. 6. 4 (東京外国語学校)	175円	
ディブスキー Dybowski, Alexandre Antoine	物 理 重 学	雇10. 11. 25~12. 11. 24 継12. 11. 25~13. 2. 24 (東京大学)	350円 370円 (11. 10. 1 より)	10. 11. 25来日 13. 2. 9帰国 21. 5. 18勲四等
サルダー Sarda, Paul	理 数 学	雇10. 6. 12~10. 12. 25 (東京大学)	325円	6年海軍省雇 38. 4. 2没

氏 名	職 務	雇 入 期 間	給料(月)	摘 要
アリヴェー Arrivet, Jean Baptiste Arthur	訓 導 法 学 仏 語	雇11. 9. 9~13. 9. 8 継13. 9. 9~15. 9. 8 継15. 9. 9~19. 9. 8 (東京外国語学校) 継19. 9. 9~21. 9. 8 (第一高等中学)	210円 252円	1846. 10. 22生 司法省と兼任 21. 5. 18勲五等 35. 2. 24勲四等 35. 5. 12没
アペール Appert, Georges	法律顧問 法 学	雇12. 11. 22~14. 11. 21 継14. 11. 22~17. 12. 12 (司 法 省) 継17. 12. 13~20. 11. 21 (東京法学校) 継20. 11. 22~22. 1. 31 (法科大学)	400円 450円 500円	12. 11. 22来日 22. 1. 27帰国 司法省と兼任 17. 11. 29勲四等 42. 7. 23勲三等
ジロー Giraud, François Xavier Oscar	士 官・ 幼年学校 教 師 仏 語	雇18. 9. 24~20. 9. 23 継20. 9. 24~25. 3. 31 (陸 軍 省) 雇35. 9. 11~ 大正 3. 7. 10 (第一高等学校)	200円 250円	1854. 12. 5生 大3. 6. 19勲五等 帰国後, 在仏 日本名誉領事
サラベル Salabelle, Lucien	仏 語	雇19. 10. 1~21. 7. 10 (工科大学)	50円	
ムガブール Mugabure, Pierre Xavier	仏 語	雇20. 9. 1~21. 7. 1 (文科大学)	112円	神父
ルボン Lebon, Michel	法 学	雇26. 1. 9~32. 9. 6 (東京大学)		32. 9. 6勲三等
エック Heck, Emile	仏 学	雇24. 11. 6~33. 10. 1 (東京大学)		33. 10. 30勲四等 大10. 10. 4勲三等

日本におけるフランス語

氏 名	職 務	雇 入 期 間	給料(月)	摘 要
ジャクレイ Jacoulet, Paul	仏 語	雇30. 9. 1~39. 8. 31 繼39. 9. 1~45. 3. 31 大正4. 10. 31解雇 (東京外国語学校)	300円	1872. 6. 18生 大正5. 1. 15 勲四等